
World of Fantasy 改訂版

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World of Fantasy 改訂版

【NZコード】

N7775Y

【作者名】

K_Sayuto

【あらすじ】

謎の大量失踪事件

その背景にあるものとは？

地球と異世界、敵と味方、疑いと信頼。それぞれの思いを載せたFantasyが動き出す。

プロローグ

—友人の失踪—

それまではただそれだけの事件であった。

—さらなる失踪—

そこで、何か集団的な組織が動いているのでは?と言ひ噂が流れ るようになつた。

—共通点—

失踪した人たちの共通点が見つかつた。だがそれはとても信じ難い事だつた。皆があるオンラインゲームやつていた、ただそれだけの事だつた。

「なあなあ、あの噂聞いたかかみにやん」

下校途中と思しき一人の制服に身を包んだ男が歩いていて片方が先に口を開いた。

「えー、しらなーい」

「ほらあの失踪事件だよ」

「あー、あれかあ。あれがどうしたのさ?」

「俺たちもやつて見ない?」

「いいんじやない

「おっしゃ、じやあ帰つたらすぐスカ プ繫いでくれよな

そしてソラ路で別れた。

登場人物

ショウ・伊志井 将

今作の主人公、高校一年生。玲奈の事が好きだが告白などした事はない。オカルトや魔術が好きだったので魔法関連のジョブについてたりする。

かみにゃん・桂峰 神紅

ショウの親友、同じく高校一年生。剣術には心得があったので「V」があまり関係のないW.O.F内では相当な強さをほこる。

ティア・桜ヶ丘 知

いわゆるネカマだったのだが、W.O.Fの世界に入ってしまい、使っていた口リキキャラになってしまった。

ユーキ・佐藤 勇季

ショウの友達、同じく高校一年生。

レーナ・阿久津 玲奈

ショウの友達、同じく高校一年生。実はレーナもショウの事を思つていたり。

第一話 パーティー結成

その時はまだ信じられなかつた。LVが5に達した時に俺が持つていたはずのマウスは杖に変わり制服はローブに変わりPCの画面に広がつていた世界は今自分の周りに広がつている。

「は？」

第一声はそれであつた。

「やれやれ本当にこんな事になるなんてなあ」

容姿は確かに変わつていたが頭の上に表示されたキャラネームは『かみにゃん』だつた。

「かみ・・・にゃん？」

「おっ、シヨウ」

と不意に後ろから誰かの叫び声が聞こえた。

「な、なんじゃこりゃー」

その声は幼げなソプラノボイスだつた。声の主を見ると先ほど出会つて一緒にいた幼じ、げふんげふん、小さな女の子がいた。

「ティアさん？」

暫くその女の子は放心していた。しかし、突然はつと意識が戻つ

たよつで急にこんな事を言い始めた。

「ほんなん幼女じゃハーレムなんて作れねえーよー」

セイで俺は気がついた。

「あのーティアさんはもしかして中身男ですか?」

「えつ、いやそんな事ありませんよ。お、わ、私は中の人も女ですか?」

「今俺つてこいつとしたよなみにゃん?」

俺が問いかけると。

「ちうだなあーショウ」

セイでティアは認めたのか。

「あーちうだよネカマだよ今じや男の娘だよ悪かったかー」

「まあ、いいんじゃないのか?」

とかみにゃんが言つて俺も肯定しておいた。

「ち、ちうだ今なら女のアレが好き放題触れるじゃんか」

そう言つてティアは胸に手を当てるがセイは断崖絶壁が広がっていた。

「そ、そんな。うそだあー」

「とりあえず、ティアとかみにゃん一皿につかないといひに行こう」

「んー、僕も賛成」

ティアはまた放心していた。俺たちは急いで一皿につかないこところへ逃げ込んだそこは小さな洞窟だった。

「ん、あの奥にいる人誰だろ?」

かみにゃんが気がつき俺も気がついた。とりあえずティアはそちらへんにおいておいた。

少しづつ近付いて行くと、その人の頭の上にあるキャラクターネームが見えた。

「『ゴーキ』ってまさかあのゴーキ?」

そこまで俺が言つたところで、後ろから誰かの声が聞こえた。

「ああ、追い詰めたわよさあさつと降参しなさい」

と女の人に入つてくるが、うちを見て驚愕きよくがくした。

「え、ショウとかみにゃんつてまさか?」

「だ、誰だッ!」

俺が叫ぶと、その人は答えた。

「私だよ阿久津 玲奈だよ」

「れつ、玲奈さんー？」

俺が驚きの声を上げるとコーラキが目を覚ました。

「いてて、わざい取り逃がした。ん、ここいつりま？」

「お前見て気がつかないかなあ？」

「ああ、お前らもか。悪いけど肩かしてくれないかショウ」

「ああ、お前やっぱ秋季か？」

「そーだ、そーだ、クリームソーダ」

・・・・・、多分今ので体感温度5度くらい下がったかな？

「そう言えば、そのティアってひとほどなた？」

そう聞いた時、ティアは焦っていた。しじみがない、助け舟を出してやるか。

「えっとな、こいつは先ほど出合った女の子だ。どうやら何かの事故で記憶を失つたらしいんだ。だから今はなんもわからないからレーナさんから教えてやってくんないかなあ？」

俺がそう言つとティアは小声で

「何でそんな設定なんだよ」

「そっちの方がいいだろ、過去とかいろいろ詮索されずに済むし第一、お前は元男なんだから女の子の事を知らないんだからそれを隠すためでもある、後これからは男口調を絶対使うな」

そう言つて俺たちがコンコン話していたのを見たレーナさんは口を開いた。

「なーに、コンソやつてんだかまあいいけど。とにかく、一応聞いておくけど、これから私たち仲間になるのよね?」

「まあ、そりゃ一緒にの方が安全だろ?しねえー」

今まで黙っていたかみにゃんが話す。

「でも、幸いな事にこの世界は「^{レーラー}」はあまり関係ないから装備と個々の能力、それにジョブとコンビネーションをえしゃりしてれば何とかなる。っと、もう大丈夫だ一人で立てる」

「えーと、とりあえずみんなのジョブをまずは聞いておかなくちやだね。私は魔銃士スペルガンナーでゴーキは魔法戦士マジックナイターだよシヨウ達は?」

「俺は、とりあえずは治療師ヒーラーでかみにゃんはサムライでティアは・・・なに?」

「えっと、お、私は・・・何だら?」

「ポケットに携帯入っていない?」この世界ではじりやり携帯がウインドウの代わりになつてゐるから

「あつ、ほんとだ」

ティアがポケットから出した手に握られていたのはスマートフォンだった、いわゆるスマホだね。

「ええと、きつ・・・・・わき・・・・・し、霧裂師だー」
ミストスラッシュヤ

「……」

「嘘だろ、霧裂師つてスーパーレアジョブで100億人に1人出るかどうかってジョブだろ」

「もう言えばユーキとレーナさんはこの世界に詳しいみたいだけじじうして?」

「ああ、それはだな」

「いい、私から話す。この世界はW.O.Tとほぼ同じ世界、といつかほとんどの事が全く一緒なんだけど少し違う世界なの」

なるほど、それでわざわまでいろいろ知つてゐるような口ぶりだったのか。

「じゃあ、俺たちが持つてる知識でもある程度はもう通用するつて訳か」

「そうそう、それで・・・・・。続きは宿屋でしまじょ」

そうレーナさんが言った後に当たりを見渡すとティアとかみにま

んは寝ていた、しかもかみにせんせ立ちながら。

「それもそうだな、ティアはレーナさんが頼む、ショウはかみにせんせたのむ」

やう言つてユーキは元気立て立ち上がり歩いて行った。俺たちもその後を追いかける。

World of Fantasyとは？

とあるオンラインゲームの名前で今回の冒険の舞台。略称は『WF』

システムは一般的なLV性だがLVが上がつてもステータスは対して変化はない、LVが上がれば新たに技を習得するぐらいである。

だからLV1でもテクニックさえあればLV10にも50にも勝てると言つ事である、あくまでスキル使用禁止での話だが。

主にステータスはジョブによつて何かが高くなり何かが低くなるものである。それ以外のステータスの変動は装備品か強化魔法、または何らかの加護以外では基本的にあり得ない。

ジョブは数が豊富でざつと200を超える、そのうち大体20位がスーパー・レアジョブ、つまりニークジョブである、霧裂師もこの中にはいる。

とまあ、この辺りまでは基本的なオンラインゲームと同じである。

種族

ヒューマン
人間 属性：大地

全てのステータスにおいてバランスの良い種族、基本的にどんな装備でも上手く使える。

ケット・シー
猫人 属性：星

猫本来の身軽さにより俊敏力、回避力がすば抜けて高く攻撃力もある程度あるが防御は低い。主にクローやなどの武器を使う。

ファングラ
犬人 属性：炎

攻撃力、俊敏力に長けていてヒットアンドアウェイの戦法が得意。犬の種類によつて特性が変わつてるので場合によつては連携が得意になる組み合わせなどがある。

ヴァンパイア
狼人 属性：風、月

攻撃力、回避力、連携がとても高く速攻撃タイプ。連携がとても得意で知能も高い。

グリジフィックス
熊人 属性：大地

攻撃力、筋力、防御に優れていて、パーティの主力となる存在。

ドワーフ
怪力人 属性：炎

その体からは想像できないほどの怪力を持つていて、指先も器用なので生産などもお手の物。

妖精 エルフ 属性：風、水

人魚の様に魔法、弓に長けている種族。あまり数は多くない。

人魚（マーメイド・トマーマン） 属性：水

女の場合はマーメイド、男の場合はマーマン。魔法や弓の扱いに特化して。普通は人間の姿だが、水に触れる事により人魚の姿へと変わる。

翼人 ハーピィ 属性：風、天空

野獣化が使用可能な種族で使うと背中から羽が生えるが生える時の痛みは相当な物であまりやりたがる人はいない。

聖人 セイント 属性：聖、太陽

賢人に劣るが相当な知識と頭の回転力を持ち近接も可能な魔法戦士つぽい種族。

賢人 ハーブライブライア 属性：無

戦闘においては役立たずだがその頭の知識、回転力は群を抜いているので、策士などの役目を与えると真価を發揮する。

竜人 ドラゴニカ 属性：炎、天空

熊人の全てを上回る大変希少な種族。どんな戦いでも勝利へと導く勝利の女神の加護がある。

天使 エンジェル 属性：聖、風

悪魔 デーモン 属性：闇、炎
悪魔と対をなす種族。魔法においては攻撃系よりもサポートに特化しており近接でも十分戦える。

天使と対をなす種族。魔法においては攻撃系に特化しており。禍の象徴として恐れられている。

神人 アポストロファイ 属性：神

神以外で神に果てしなく近い種族。現在もその種族の末裔まつえいがいるかどうかは不明。

幼女 ロリ 属性：ボクツ娘

大つきいお友達に人気な・・・「冗談です、すみませんwww

どの種族も見た目は人間となんの変哲へんてつもないが妖精や猫族などは少し小柄こがらなほうで、竜人や熊人は大柄おおがらな方であると言う事だけ。動物系の種族は野獣化フランシューアウェイク、竜人は半竜化ドラゴニクス、神人は半神化アポストロファイアードなどを使う事により本来の姿へとなり種族の特殊能力のアップやステータスの飛躍的向上などが起きる。

野獸化を使用できる種族は興奮状態に陥ると半獸化状態になり、猫

の場合人間×猫耳×猫尻尾状態になりその種族の特性が目立つようになる。

第一話 覚醒、チートスキル

「と、まあ」こんな感じかなあ

俺はレーナちゃんに聞けるだけの事を聞いた。

「現時点では何もヒントはない……か」

「え、なんの?」

俺は一泣おいてその間に答える。

「いやあどうやら元の世界に帰れるのかって事、まあ普通に考えれば魔王を倒すとかそのあたりなんだなってさ」

「えっと、その事なんだけど今日シロウくん達に会つてしま前に怪しい奴らがいて追いかけてたんだね……」

「その途中で逃げられ、ゴーキもやられた……と?」

「うん」

暫く沈黙が続いていた。

「じゃあ、あこひりを捕まえるのが当分の目標かなあ。

「じや、話は簡単だそひりをぶつ瀆す」

「いや、ぶつ瀆しちゃダメでした」

レーナさんが慌てて正す。つてかかみにやんねきたのかよ。

「捕まえて情報を、つてもう寝てるよー!？」

「ははは f^__^ .」

翌朝

「みんな聞いて、昨日ショウくんと今後の事を考えた結果・・・
3日よ、3日でパーティーのコンビネーション及びレバ上げをする。
そしてその後は例の奴らの搜索」

「別に僕はなんでもいいよー」

「俺も異存はない」

「俺も異議ないよな?」

「異議なし」

「多分大丈夫」

「それじゃ、トレーニングよ」

1時間後

「ハアハア、まだ終わってないのか?」

俺たちはいきなりながら死に直結するかもしないミスを犯して

しまつた・・・・・それは。

「もうっ、なんで3人とも装備初期状態でしかもモンスターハウ
スにはまるのおおお」

「ふんっ、だが僕の敵ではないつ

そう言つてかみにゃんは初期装備のショートソードを両手に敵の
ど真ん中で暴れまわる。

「かみにゃん、へるふみ～。ヒーラーがどうやって一人で10体
もあいてしなやならんのだあー」

「だが断るつ

かみにゃんはそう言つて髪をかきあげる。そんな事しないで助
けてマジでやばい。

「いや、残りHP5なんですけどつ

「ええい、ヒールガン」

レーナさんの杖銃フレイルガンから緑色に輝くHP回復効果を持つ光が飛んで
きて、敵にあたる。

「あつ

あつ、じゃないよあつじやまあ期待してなかつたけびや。

「ええい、秘技、ポーションがぶ飲みー」

「やばいよおー、この口リの体がひめいあげてるよー。もつ
げんかーい」

そう言つてティアが床に伏せる、いわゆる死んだふりだ。

「ティアーお前もたたかええー」

「いやだあー、なんもスキルないんだもーん」

そう言つていると。

「ティア、レベルアップ レベルアップ システム
【スラッシュ】
鎧鼬》バスター」

と、ティアの端末からのアナウンス。

「ああもうつ、いつくぞおー【霧鎧鼬】

ティアがスキルを発動すると、ティアの周りに霧が立ち込め、急に霧が四方八方に弾ける。弾けた霧に触れたモンスターは触れた部分から切れた。そして、見事に20体はいたであろう魔物は全て肉片となつた。

「レベルアップ レベルアップ スキル習得」と言つアナウンスがいたるところできこえた。

なんだよそのチートスキルはー

第三話 心が読める青年

あたり一面魔物の屍骸。どんなチートスキルだよと思いつれをはなつたティアに視線を向ける。

「ハアハアハア、うつ

ティアは胸に手を当てて息が切れていたかと思つと急に倒れた。

「ティアっ」

俺はすぐに駆け寄り受け止める。

「ティアちゃん？」

遅れてみんなが集まつてくる。俺はティアの心臓部分に手を当てるとトクントクンと確かに心臓は動いていた。

「一体なんなんだ？」

俺の問いに答えたのはヨーキだった。

「強力なスキルにはそれ相応の精神力が必要だから、耐えきれなかつたんだろう」

「そつか、まあ助かったな」

俺はティアを抱きそのままみんなと一緒に戦い始めた。

『ティア編』

目が覚めるとあたりは真っ暗でベットの上だった。

そつか、あの時に意識を失つて。

私は宿屋からでて少し風にあたるために外へでた。

「わあ、綺麗」

空には星がたくさん光つていたが視界の左の方に人影が見えた。

「よつ、田が覚めたか」

そこにいたのはショウだった。

「なんだ、ショウか」

「俺で悪かつたな。ところで、お前体大丈夫か？」

「うん」

「そーか、つたく心配したんだぞー。お前の心臓付近触つて見たら心臓は普通に動いてたけどさ」

は？今なんて？心臓付近、って胸？男に胸触られた？

「まさか、お前胸触ったのかー、」のロコマー。

私は多分顔が真っ赤だったと思ひ、シヨウに殴りかかったが片手で止められた。

「やつぱりな、そんな反応するって事は……お前女だろ?」

「は、何を言つて?」

「あー、言ひ直そう。お前元の世界で男だったつの嘘だる。男だったらはじめの方はそんな反応はしなこり。まあ確かに器に合わせて心は変わつてくけど一日や兩日で変わるなんてあり得ないしな」

「…………いつから気がついていたの?」

「はじめから、俺さ人の心が読めるんだよ」

「ふうん、なるほど。って、あつまだ私胸触った事許してないよ?」

「ぱつって顔をシヨウにする。私はそのまま言い続ける。

「一体どんな形で責任とつてくれれるのよ、こんな小さな女の子に手口出すなんていのロコマー、私ももしも、もしも」

あれ?止まらない?感情的になりすぎてロコトロールが効かない。」のまじやんでもない事を言つてしまいそ。

「お嫁に行けなかつたらあんたが貰つてよね

あー、言っちゃつたー。多分今の私は顔が真っ赤を通り越して真っ赤つかなんじやないかと思う。しかもショウはすごい困つたよつな顔をしていた。

「あー、じやあお前も早く寝ろよなあー。お休みー」

あ、
逃げた。

でも、心が読める人・・・か。あーあ、なんか明日嫌な予感するなあ。嫌な予感は当たるけどいい予感は外れるって言葉もあるし。

私はすぐそばの海に向かって歩き出した。

私はしばらく歌つていた歌つていたと言つてもうう覚えの音楽に
合わせて適当にラーつて言つてただけどけど。

「綺麗な声だね」

不意に後ろからかけられた声に振り返る。その声の主は青年だつた。

「おつかれさう」

「もう少し歌つてくれないか？」

「うん」

そう言ってまた私は歌い始める。

第四話　「」の口止められたサムライスタイル

翌朝　《レーナ編》

「あーって、昨日はティアちゃんのおかげでもう予定よりも早く目標一ヶを達成できましたー」

わー、パチパチ。と効果音がでてそつだがあたりは静かだった。

「みんなテンション低くない?ビーッしたのー?」

「ビーッしたのー?と言われても、ティアはインザベットしかしにゃんはまた立ちながら寝てるじゴーキは50度寝してるしかみにゃんはまだ立ちながら寝てるじゴーキは50度寝してるじ

50度寝つて一体何時から寝たり起きたり繰り返してるのよつ、と突っ込みたかったが先に言いたい事があったので飲み込んだ。

「さて、今日はみんなの装備を整えたいと

「僕は和服に刀で」

「かつこーい鎧があればなんでも」

「むこやむこや、私はペンクのワンペース」

つて、なんで装備の話を始めた途端にみんな会話にはこむのよ。

「俺は・・・治療師だからそれっぽければなんでもいいかな」

「うーん、とつあえず昨日のドロップ品の装備とか回復薬とか分配して余ったのは売ろうか」

「せんせー」

「えっと、分配するものはポーションが128個つて多すぎ。それに短剣、名称は『ストライクダガー』。他には刀があるね、名称は『魔刀 鷹の翼』か、翼つてなのとおり軽いねー。後は・・・短剣、名称は『ステイレット』かー、短剣にしては長いねえー」

「よし、僕がその刀をいただこう」

そう言つてかみにゃんが刀を持つていく。

「私はこの短剣を」

ティアちゃんはストライクダガーを持つていく。

「じゃあ、俺これ持つてくから転職する」

そう言つてショウガが持つていぐ。

「よし、街に装備を整えに行こー」

「」「おー」「」

ゴーキの発言にみんなが賛成する。

《ゴーキ編》

とりあえずいろいろとありますみんなの装備を説明しよう。

ショウ

武器：スティレット
頭：バンダナ
服：ローブ

かみにゃん

武器：魔刀 鷹の翼
頭：サングラス
服：デンタラスの服
いわゆる和服（黒）

ティア

武器：ストライクダガー
頭：大きなリボン（赤）
服：ワンピース（ピンク）

レーナ

武器：キヤンデルブロード
杖銃の一種で遠距離特化
頭：ガンナー・キヤップ
服：パークー

ユーキ

武器：ショートソード
頭：バンダナ
服：チエーンメイル

「よーっし、一通り揃つたな」

「うん、俺もこれでいいかな」

「ひょっとまつてよかみにゃんそれ危ないんじゃない?」

「そう言つてレーナさんが指差したのは刀身剥き出しのかみにゃんの刀がだつた。

「そうだなあ、やうだ知り合いに鍛治職人がいるからそいつに鞘さやを作つてもらおう」

「ん、その入つてるの世界の住民じみん?」

ショウが訪ねてきたので答える。

「まあな、前に危ないところところを助けたんだよ」

「へー」

「ほら、あそこに水車みずぐるが見えるだろ。そこの隣となりの家いえだ」

俺がやつていた家のそばまで行き家の扉を開けた途端とばんに。

「ゆーつせー」

一人の女の子めのこが俺に抱きついてきて俺はよろめき後ろの三にドボンンと水しぶきあげて落ちた。

一人の女の子めのこが俺に抱きついてきて俺はよろめき後ろの三にドボ

第五話 タイアモンドの全力疾走は意外に疲れる

『シヨウ編』

いきなりユーキに女の子が飛びつきをしてユーキはそのまま川へと落ちた。

「大丈夫かユーキ？」

俺が呼びかけると「大丈夫だー」と返事が帰ってきたので安心する。

「で、その子誰？」

「えっとー、じーじの鍛冶屋の娘さん」

レーナさんの質問にユーキが答えると女の子は起き上がり自己紹介を始めた。

「始めてまして、私は刀衣^{とじ}と申します、それでいてユーキの許嫁^{いいなづけ}です」

許嫁ですつと詰つ時にユーキの腕に抱きつぐ。

みんなが驚いていると「いや、許嫁じゃないから」とユーキの修正。

「えー、私の心はもう初めて出会った時からメロメロですよー」

「ゴーキビんなテクだ？」

俺が聞くとヨーキは

「テクなんかねえよ、ほら危ない」といを助けたつてのがこいつ
だつたんだよ」

「バリバリフラグ立てたねえ」

レーナさんがそう言ってティアを連れて鍛冶屋に入つてく。それ
に続いてヨーキ以外のみんなが入る。

鍛冶屋の中はドラ ハなどこよくありそな感じだつた。

「おとーさん、ヨーキきたよお」

と刀衣が言うと奥の方から大柄な人が出でてきた。

「おお、いらっしゃい。つてヨーキびしょ濡れじゃねえか

「あー、ちょっとね」

「ほれ、奥にタオルあるからそれ使え」

どうやら店主と思しき人は外見の割に優しい人のようだ。

「えーっと、今日はどんな用で?つて見りや鞘が必要だつて分か
るか。おいおい、君が持つてるの魔刀じやねえか」

店主がかみにゃんの刀を見て言つ。

「あー、これね。魔物が落とした」

かみにゃんが刀を差し出しながら囁く。

「で、これに合つ靴つてわけか……ん、その二人が持つてる短剣にも靴が必要みたいだな。作つておくから待つてなさい」

そう言つて店主は奥に行く。

「ねえねえ、ゆーきーあわせあわせ~」

刀衣はユーキの腕を降りながら甘えてくる。

「分かつた分かつた、じゃ外にでよつな」

「ねーねー、ていっちゃんも一緒に遊びたーい」

ていっちゃんとは多分ティアの事であろう、その当のティアは武器を眺めている。刀衣はティアの手を引つ張つてユーキと一緒に外へ出る。

「わて、僕は寝るか」

そう言つてかみにゃんはそばの椅子に腰掛け。

「シヨウ君私達も行こつか」

「ああ」

外へ出ると刀衣はボールを持っていてゴーキは棒を持っていた。

「野球かー、よつしゃー燃えて来たつ。ゴーキかつ飛ばせー」

俺はそういうながらじきとつなポジションへ走つて行く。

「ふふふ、ゆーめいーに私のボール打てるかなあー?」

「ふつ、生憎あいごお子こちやまに負けるよつな腕は持つてない」

「よつし、いっくべーー」

やう言つて刀衣はモーションにはいる、そしてゴーキも構える。

「覚悟つ、必殺殺人必中ストライクキラーボール」

「つて、俺に当てて殺したいのかストライクを取りたいのか全くわかんねーツシツシ」ツシの多い名前だな、おい

「いつか必殺と殺人とキラーの時点ではつは殺すつもりだし、しかも必中までもはいつてる。死刑狙い確實だなwww

やう思つて見てみると思つたとおりボールはゴーキの顔面にまつしへり。

「あぶねー、ゴーキ避けひつ

「黙れ小僧つ、《ファイアースライド》」

《ファイアースライド》とは武器に炎を纏まといわせるスキルだ。スキ

ルの効果により炎を帯びた棒はしっかりとボールを捉えホームラン級の当たりを繰り出す。

「レーナさん、なんか吹っ飛ばす魔法がなんかで俺を飛ばしてくれ」

そう俺が走り出しながら「お」とレーナさんは言つて杖銃を取り出し構える。

「《H》アーショット》フルパワー、チャージオンツ・・・・・はつしゃーー」

《《H》アーショット》とはそのままで風を撃つ魔銃士のスキルだ。そのスキルによつ出来た風にのり、俺はボールの落下地点まで行く。そして。

「あやーつち

レーナさんがそう言つて俺の手にはボールが収まつていた、が。急にボールが発火し俺は落としてしまつた。なぜド ベースの技が再現されてんだよ。

「おっしゃー、そんだけとばせばどのみちランニングホームランだぜ」

ヨーキはダイアモンド（実際にはベースすらないが）を走つて言う。

「あいつ、おっとなげない

それを見てレーナちゃんが叫び。確かに飛ばしそうだなあと俺も思
う。

「うう、うう」

あ、泣こむやつたか? そりゃひいてはいけないわよ。

「ちーきーーかつーこーよーーー

と叫び始めた抱きつこうとした。

第六話 処女の危機

「ゆーきいー、次は何して遊ぶのー？」

「そうだなあー、じやあ」「

とユーキが答えようとした時、【殺意】が感じられた。そう、俺は人の心が読めるからそう言つた感情も感じる事ができるのだ。

「ユーキ、刀衣を守れえー」

俺がそう言った直後、どこからともなく何かが刀衣に向かって一直線に飛ぶ、がそれは突如間に現れたユーキの体の中へと消えた。

「ぐつーー?」

そう言つて腹を抑えるユーキの手は紅に染まつていた。

「敵?」

レーナが銃弾が飛んで来た方に杖銃を構える。

「ゆーきいー、しんじややだよ」

「大丈、夫だ。これぐらい、魔法で、何とか、なる

俺は急いでユーキに駆け寄り《ヒール》を唱える。しかし、傷が深すぎて回復が間に合わない。どんどん血が出てくる。俺は何度も《ヒール》を唱える内に銃弾が飛んで来た方から2人の男が現れた。

「やつべー、ミスつちまつた。ビーアルーハーハー。」

ライフルを持つた男が尋ねる。

「キンダだからもう少し粘れと言つただろ?」

黒い鎧に身を包んだ男が叫ぶ。

『ティア編』

一方その頃ティアはといふと?

落ちたボールが転がって行ってしまったので追いかけていたところ当たり一面知らない所。

「迷子ナーハーハーハーハウ」

と叫ぶ少女、さうその少女こそティア。

「ハーハーハーハー? みんなハーハー?」

まあい、そーとーまあい。というかなんで当たり一面景色なの?

ビーしょーもなく歩いていると不意に後ろから肩を掴まれた。

「ひやつー?」

そう思わず声をあげてしまいつかんで来た者を見上げる。

「やあ、君一人かい? 良かつたら俺と ぶへえ」

私が殴りその瞬間に少し距離をあく。

「ふ、なかなか痛いじゃないか、そういう風に嫌がる口についてねえいいねえ最高だねえ」

まずい、こいつ変態だ。そう直感した。私は少しずつ後ろへ下がつていくが急に何かが足を掴みその場に倒れてしまう。

「いつ、たあ、なにこれ？」

それをよく見てみると骨の手だった。私はそれを見て恐怖に溺れた。

「ダメじゃないか、口にはあまり乱暴をしちゃいけないよ。あ、こわがらせちやったねえ、この子は僕のしもべさ」

「いつ、まつまつこの骨だらつて壊つ事ば。

「死靈使い（ネクロマンサー）」

「あつたりー」

私が答えると男は指を鳴らし答えた。そして、急に私の上に覆いかぶさつて来た。

やばい、処女の大ピンチ。

やう思つていろいろと対処法を考えると一つの方法が思い当たつた。それはまだ未使用のジョブのスキルを使用すると言う事だ。だ

がそのジョブの説明を見る限り、最悪命の危険まで伴うといつが、この際かまつてられない。私は使う事にした、そのジョブの名とは『羅刹使い（らせつつかい）』その一番初級のスキルの使用方法は自分の血を捧げる事だった。私は手を握りしめた、そして爪を手のひらにつきたて鋭い痛みとともにじわじわと血がにじむ。

「我が血を喰らいて我が前に降臨せん、出でよ死体喰らい（アンデッドイーター）の暗黒魔グレンデルよ」

私の血が地面に垂れ、そこから魔方陣が浮上する。そして、1匹の生物が姿を形成し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7775y/>

World of Fantasy 改訂版

2011年11月30日18時45分発行